

田村の家族たち

両親、祖父母の出来事と
キリスト教文化からの視点

田村明-周辺の紹介
「まちづくり」から「市民政府」に
展開させた背景と深層

兄、田村明のお話をするにはある意味で難しい作業です。ただ、あまり世の中にはみせなかったであろう、彼の周辺にあったこと、起きたことを私なりにまとめ、そこから垣間見える彼のとなりや人との距離感、接し方について感じるものがあればという、思いでお話することにいたしました。

祖父・田村幸次郎は宮大工でしたが、仕事中に転落し亡くなり、実の母親を知らないまま、梅津家で養父母に育てられました。梅津家は西洋散髪屋を営み、金回りはよかったようです。おかげで幸太郎は当時としては珍しく中学にまで行かせてくれました。良い先生に恵まれ学問の喜びを知り、生涯それが財産になったように思います。ところが、青春に養父養母の間で騒動が起こり、養父は幸太郎にまでつらく当たる騒ぎで結局、梅津家を出ざるを得なくなります。こうして改めて田村姓を名乗ることを決意しました。18,9歳の青年が養父母とはいえ、両親の離別を経験し、幸太郎の悩みは大きかった。やがてキリスト教村上教会に通うようになります。上の学校には行けなくなりましたが、教会でしりあった友達の縁で幸太郎は上海に行く機会が与えられたのです。幸太郎はのちの妻・忠子の姉、愛子と事件絡みで遭遇するのです。愛子の夫、宝田一蔵が村上中学の先輩であったことも大変不思議な縁です。こうした出会いから幸太郎は忠子の家族と触れることになって行きました。

田村幸次郎(祖父):
宮大工、**仕事中に転落死**
幸太郎(父):
梅津家へ養子

1. 実の母親を知らず
2. 養父のお蔭で当時としては破格の中学へ
3. 青春に家庭騒動
4. 田村姓に帰る
5. **キリスト教村上教会へ**
6. **上海行きの機会**
7. **愛子(忠子の姉)と事件絡みで遭遇**
8. **内村鑑三との「出会い」**

吉田亀太郎(祖父):
化学の勉強(石油精製)新潟
潟の仕事場の隣にパーム
牧師住居

1. **パーム牧師との「出会い」、開拓伝道師の道へ**

石黒まち(祖母):
著名な油屋の娘

1. **家の倒産で苦境**
2. **キリスト教新潟教会へ**
3. **パーム牧師との「出会い」から横浜共立女子に寄宿生**

忠子(母): 5女として

1. **相馬中村は当時、まだ辺境、キリスト教を受け入れる要素は非常に弱い。**
2. **激しいイジメを受ける**
3. **浦和の教会へ、**
4. **婚約者の世界で失意**

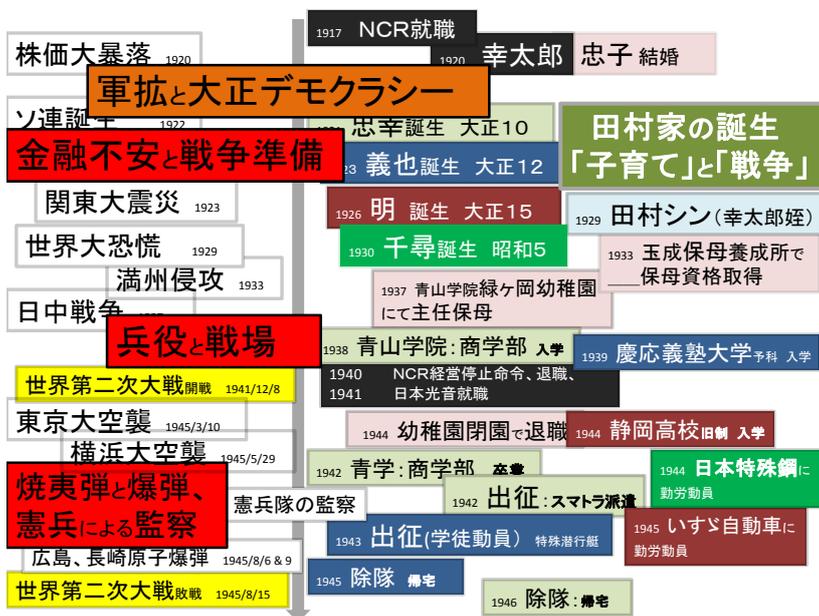
寶田一蔵、愛子の仲人で幸太郎、忠子結婚

忠子(明の母)の父・吉田亀太郎は化学、石油に興味を持ち、新潟に行きます。その仕事場の隣に新潟教会のパーム牧師が住んでいたのです。なんとなく異国人に興味をもった亀太郎はパーム牧師と話をするようになるのですが、ある時、「牧師にならないか？」と誘われ、引き込まれるように牧師になって行きました。一方、忠子の母・石黒まちは油問屋の娘でしたが、石油の台頭で家が倒産、そのショックの中、たまたまそこにあったキリスト教新潟教会に通うようになりました。そこにパーム牧師との出会いがあり、聡明だったまちに牧師は横浜の共立女子で学問をするようにさそいます。数年してパーム牧師は東北開拓伝道を計画、その先鋒に亀太郎を指名します。同時に安定した生活基盤としてまちとの結婚を勧め、こうして二人は結ばれます。仙台での布教が軌道に乗り、亀太郎は相馬中村に次の開拓地を求めます。そこで5女として生まれたのが忠子でした。しかし、そこでキリスト教に対する大きな迫害を経験します。石を投げられ、追いかけるなど、激しいイジメを受けたと話す、とても辛かったのでしょう。その話は二度と聞くことはなかったのですが兄弟たちにもそれぞれ機会を作って同じ話し

ていました。時代は数十年の違いもあり、都会と地方の違いもあるでしょうが我が家はキリスト教であることの意味を告げられたかと思えます。その後、吉田家は浦和教会に移ります。忠子は絵画や音楽が好きでした。手じかあったオルガンの演奏を覚え、教会で讃美歌の伴奏をしました。また、絵筆をとっては竹久夢二のような絵を描くことで過ごしました。

さて、幸太郎の方は上海で愛子との出会いから、その知らせを携えて吉田家を訪れます。ところが、上海帰りの幸太郎は当時としてはキザっぽい青年に映ったのでしょう、吉田家では直ぐには受け入れられなかったようです。幸太郎はそれまでの経緯からクリスチャンホームにあこがれを持ち、忠子への思いが内に秘められていたと思えます。そうはいつでも帰国後、自分に合った仕事になかなか見つからず、よく仕事が変わったといえます。しかし、NCRに勤めてからすっかり職が安定し、さらに内村鑑三に出会ったことですっかり人生観が一変したようです。一方、忠子は自分に思いを寄せていた青年とついに婚約にまで至るのですが、何と婚約した数ヶ月後に彼は病を得て帰らぬ人になってしまいました。忠子は大変なショックだったと息子たちに話しています。しかし、それらを乗り越える何かの働きがあったのでしょう、幸太郎と忠子は姉、竇田一蔵、愛子の仲人で結婚することになりました。

幸太郎と忠子は1920年に結婚しました。4人の子供、忠幸、義也、明、千尋が2年、3年、4年の間隔で生まれます。その間、株価大暴落、関東大震災、さらに世界大恐慌、満州事変、日中戦争、と矢継ぎ早に事は起き、世の中は騒然とした時代に入るのでした。忠子はここで幸太郎の収入だけでは4人の男の子を育てられない、と考え、自ら働き、何がしかの収入を得たいという意思を固めます。そして荻窪にあった保母養成所で勉強を始めます。幼稚園の先生になりたいと考えたのです。幼なかつた明も小学生に行くようになり多少分別も付く、母親が家を空けることをかなり冷静に見ていた様に思われます。世界大恐慌という大事件で幸太郎の収入減、さらに姉の他界で姪のシンを引き取る形でお手伝いに来る、ということで恐らくそれが最良の解決策であったのでしょう。千尋は丁度、シンが乳母のような形で育つことになりました。



第二次大戦がはじまると、上の忠幸、義也はすぐ兵役に引っ張られました。忠子の悩み、苦悩は大きかった。そういう状況を見ていた明は「自分は戦争で死にたくない」という思いで、なんとしても理系に進もうと考えます。理科は嫌いではなかったのは確かですが、浪人しないで進めるところ、それが旧制静岡高校の理系だったわけです。焼夷弾と爆弾にさらされる、ということがどんなに恐ろしいことか、戦争の大変さは死と向き合う兵隊も無抵抗に逃げ回らねばならない市民も言葉では言い表せない苦痛です。その上、自分を守るために人を攻めるという仲間の中にも敵がいる状況もあるのです。とりわけ官憲、なかでも憲兵隊はひどかった。我が家の周辺にも何度か現れました。家にいたシンは私に「家の周りを調べられているみたいだ」と告げました。しかし、辛い、内地戦は行われることなく敗戦、というピリオドが打たれたのです。



戦争が終わりましたが家族全員、仕事が無くなりました。それでも、幸太郎はGHQの調査機関、CCD（手紙の翻訳）、忠子はGHQのパークホテルでメイドのリーダーの仕事をするに、二人ともささやかではありましたが何とか収入を確保したのです。二人がそれぞれ好きだった英語が役にたちました。一方、戦後すぐに始まった矢内原忠雄の聖書講義には幸太郎、忠子、忠幸、明、千尋の5人が参加します。明は大阪に行くと黒崎幸吉の聖書講義に参加しました。1948年には幸太郎はNCRに復職、1949年には忠子が草月流の師範の看板が役に立ち、初めは外国人に、やがて家でお花の先生をするようになり、人の出入りの結構、激しい家となりました。

明は東京大学工学部建築学科に進みますが、ただ構築物を作ることだけでは心が躍らなかったこと、卒業研究で都市計画の世界に目が開かれたこと、運輸省という官僚組織のなかに入ってその硬直した組織の内側に自分の存在を置きたくなかったこと、広い都市計画的な仕事には法律的な知識が絶対に必要だと思い、東京大学の法学部に入学してみても勉学の意味合いをかなり実務的なものに切り替えたこと、さらに、巨大な民間組織、日本生命に行っても組織が求めてくること、と自分がやりた事はなになのを模索する時間が長く続きます。さらに、結婚によって充実した家族をとの願いも妻、眞生子の不妊症という事態に遭遇して単純な家庭的なものを求める事は出来ないを知ったこと、それらがいろいろな形で溶け合い、融合し、昇華し、展開が始まるのです。兄弟の中ではとりわけ母親に付いていた彼は事ごとに彼女に話し込んでいた風景が思い出されます。

1961年10月、田村家の実質的な支柱、幸太郎が、そして同年、12月に精神的な支柱であった矢内原忠雄が他界します。所が、この後、母にも兄弟たちには目まぐるしい仕事の展開が始まります。明は至極安定した仕事の日本生命から自分のやるべき道を切り開くようにKK環境開発へ、6大事業を提案、飛鳥田市長のブレインとして横浜市企画調整局に入り仕事を展開して行きました。義也は岩波書店の「世界」の編集長になりますが、自分の義侠的な判断で会社に迷惑をかけたと二度も辞表を出しています。忠幸はKK荏原ユーザーライトの立ち上げに成功し、千尋は化学の世界では50年以上も未解決でフグ毒、テトロドトキシンの化学構造を決め、それにより、当時としては珍しいイリノイ大学へポストドックで留学する事が出来たなどという展開でした。さらに詫だこ



1962年から86年にかけて、幸太郎が亡くなってから、母・忠子を中心に忠幸、明、千尋の三人が聖書を読んで、その解説をするという家庭集會を毎月、開くことになりました。聖書講義というのは決めた範囲を担当者が調べ、皆の前で発表するのですが、私がとりわけ記憶に残る明の話では「旧約聖書も新約聖書もその当時の最高の理解力、判断力で表現した記録として読むと、いろいろ、すんなりと受け入れられる事が出来る。現代の知識で批判的に読むのは聖書の正しい読み方ではないのではないか」という主旨のことを話した時に「なるほど」と思ったものでした。また、この集會では明の話が好評で、私の家内からの評価でも「明さんの話が一番わかりやすい」でした。この集會は家族そろって夕食をとともにしますが、さらに終わると義也宅に寄って義也、明、千尋の3家族で二次会の団欒を続けることが出来たことも有意義でした。特に義也と明の対話は非常に面白く、義也が社会正義派的な発言で明の行動に多少のチェックを入れる。どうしても明の立場では「なかなかそれは実行できないものだ」という、すると「やっぱり東大なんだな」という義也の評価に明は不満顔、というシーンが何度かあったことです。明は「強者の立場、判断基準で物事を進めてはいないつもりだ」というニュアンスで訴えるのですが、弱者であるが故にさらに追い詰められてしまう、という歪んだ社会構造の存在を知っている義也からの所謂、突っ込みに画一的な行政判断が難しい、という明の気持ちを察した一場面でした。そんな中、1975年に千尋の次男、幸生が他界します。私たちは内村鑑三から出た矢内原忠雄の無教会派の流れにいたことで、教會的な儀式、形式のない世界でしたから事が起きると大変です。周りの人達で葬儀をしなければならないのです。この時、明は横浜市に移り六大事業などで最も忙しい時でしたが、彼が中心になって「幸生君を天国に送る」という集會を小学生の友達と一緒に開いてくれました。葬儀屋さんに「素晴らしい印象に残る葬儀を拝見しました」と挨拶されました。

明の信仰について一つだけ申し上げたいと思うことは、横浜時代以降、明が対外的には「信仰」とか「祈り」という言葉をを一切封じてしまったように見えたことです。様々な人々との交渉事があり、信頼関係が構築できていないときに無暗に自分をさらけ出すことはうまく事が進まなくなる、とりわけ「まちづくり」のような人間関係が重要なキーに作用する仕事の場合はそうであろうと思われます。しかし、田村明塾でのテーマで全くこれを取り上げていないことにはある種の不思議な感覚をめぐいきれません。明があえて消したのか、あるいはもっと他の事を言いたいけれど、「宗教」や「祈り」という言葉では伝えられない何かがあったのか、それを深めることの時間、意識、あるいは他の意図があったのか、これらは田村明の内面を探るという意味で、今後研究をしていきたいと思っています。

最後に明が社会的な評価「賞を頂く」という事に対してどのような反応をしめしたか、という点を見てみます。彼の一つの指標かもしれませんが、何と言っても建築学会賞の大賞は素直に嬉しかったようです。その大きな理由は建築学会という集団のなかで、それまで何といてもハードの構築物を作った人が対象になるのが通例、あるいは、その感覚を越えられない、と思っていたのが、今回は「都市全体への有機的な結びつき」という視点での賞で、建築学会自体に広がりが出てきたことに素直に喜びを感じたと、述懐していました。兄弟からの「思い」としては「賞を頂いた」という事で田村家の家族みんなでもっと祝ってあげてもよかつ

たのではなかったか、そんな思いも致します。終盤、人へのアプローチが大きくなり市民意識の発展を願うわけですが、まちづくり協会、横浜まちづくり塾、現代まちづくり塾（東京）、自治体学会などへ大いに力を注いでいた姿を思い起こします。明の周辺という事で多少、蛇足ですが幾つかの映像と簡略的な説明を以下、ご覧いただきます。

恩恵めぐみの露 富士山頂に降り、滴したたりてその麓をうるおし、溢れて東西の二流となり、その西なるものは海を渡り、長白山ちようほうくさん(を洗い、崑崙山(こんろんさん)を浸し、天山、ヒマラヤの麓に灌漑(みずをそそぎ、ユダの曠野(あれ)に至りて尽きぬ。その東なるものは大洋を横断し、ロッキーの麓に黄金崇拝の火を滅し、ミシシッピー、ハドソンの岸に神の聖殿みやを深め、大西洋の水に合して消えん。アルプスの嶺はこれを見て曙(あけぼの)の星とともに声を放ちて騒うたい、サハラの大漠は喜びで蕃紅(さくらん)の花のごとく咲き、こうして水が大洋を覆うごとく主を知るの知識は全地に充ち、この世は化してキリストの王国となれり。われ睡眠(おむり)より覚め、独ひとり大声にて叫びうたう、「アーメン、慈(し)かあれ天に成るごとく地にも成らせたまえ」と



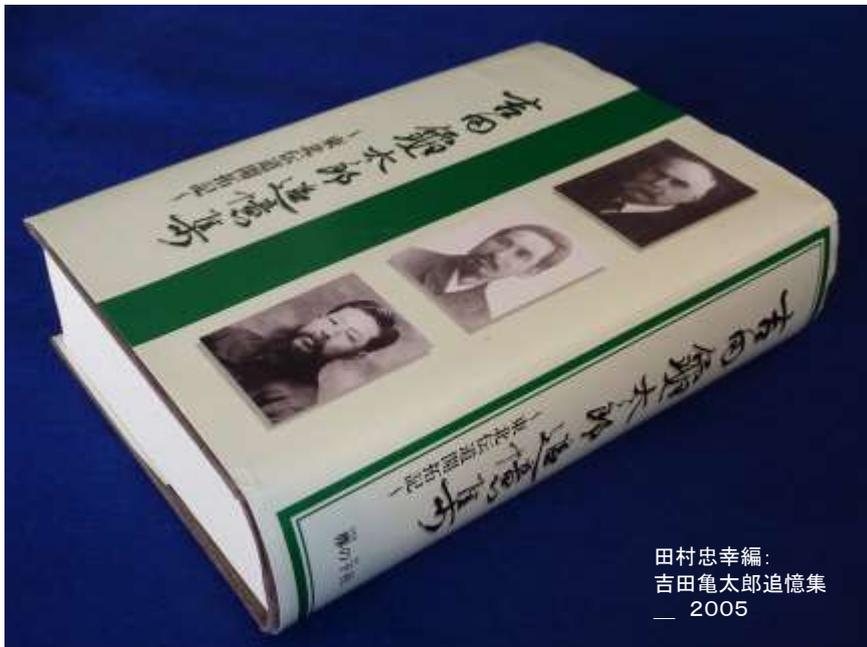
父の書、1955年、頃、 内村鑑三の「初夢」

こどもたちが小学生の頃はよく書き初めをした。その血を継いだのは義也である。明は思っていることを早くはき出したいとおもうのか字は雑だった。しかし、思いを込めてゆっくり書けばそれなりの字で書いていた、たとえば明宅の表札など、

母の絵、1915年頃右、1965年頃左



本文中にも書いたが幼い頃にイジメを受け、本来、外向きの子供だったが内にこもるようになる。絵と音楽が彼女の友達だった。幼稚園の先生をやるようになってから積極的に人に向かうようになる、幸太郎の他界で昔の夢を叶えたい 65歳から本格的に油絵を学び、80、85歳で個展を開いた。



田村忠幸編：
吉田亀太郎追憶集
— 2005

忠幸は4人の兄弟の中で最も整理の好きな少年だったし、長じても非常にしっかりした字で克明に書く、パソコンのない時代だから字をきれいにかける人は喜ばれた。この本は祖父、亀太郎に関わる書物を全て収録したもので良くここまで集めたと思う。、労作である。定年を迎え、戦前、亀太郎の追憶集に関わった幸太郎の労作を元にさらに各地にあった書類、英文を集めてた。従兄弟の兵頭謙三のチェックを受け完成した。

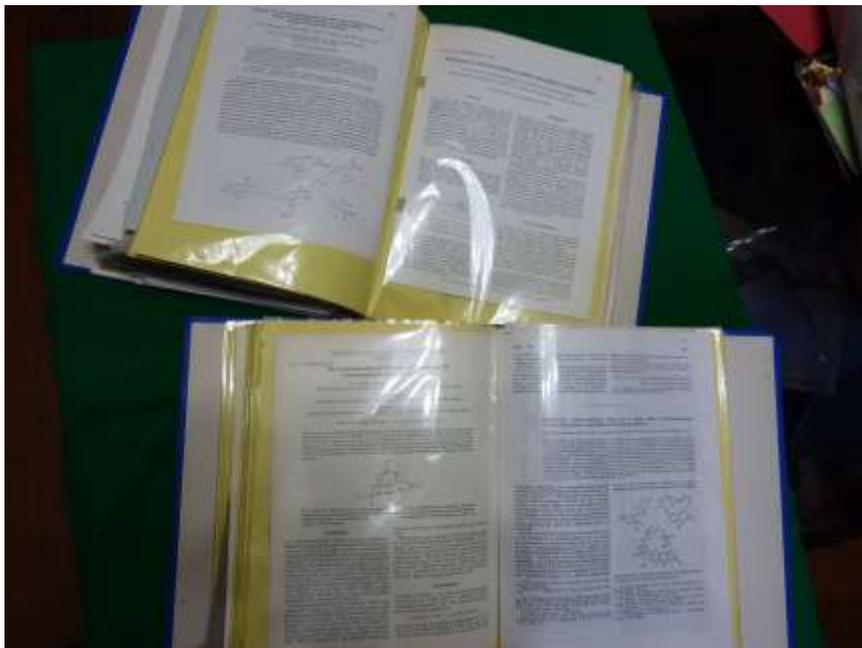


田村義也の
世界

兄弟4人のなかで義也は非常にユニークなひとでした。どちらかというと一人部屋に閉じこもり自分の好きなことをやるのです。兄弟一緒に遊んだのは戦前、4人で将棋をやったことくらい、青年になる頃「家庭新聞」なる発刊物（往復はがきサイズ程度）を作って我が家の出来事を書き、社会時評を彼なりの評価をしました。「のの字ものがたり」は彼自身の手になる唯一の発刊物、武蔵美術大学で教鞭を執った関係で「背文字が呼んでいる」を纏めていただきました。「岩波書店」定年退職後「装丁や」という地位を確立し、本に独特の個性を作り著者の意向を表現するという貢献をしたようです。



明は思いが先に立つ人です。放送大学でも講師役をやったことがありますが聞いていると、とても早口でした。父から「話をゆっくり、間をおけ」といわれた述懐しています。書き物も原稿に手書きの時は思いが先になり、字が読めなくなる、出版社泣かせだったと聞きます。しかし、書き物の内容は上手でした。彼の自慢は方々の大学などから試験問題などで使いたい、と言うリクエストが頻繁にあったことでした。江戸東京、横浜、は義也の装丁、岩波新書の新書は義也が既に岩波を退職した後の書物です。定年後もこれだけ本を纏めることが出来たのもワープロのお蔭だったと思います。



千尋は著作物はありません。あるのは研究論文だけです。それでも私企業の研究所で働き、100報以上纏めた人はそんなに沢山はいないでしょう。沢山の化学物質の構造を決めることが出来たのは「X線結晶解析法」という近代兵器を駆使出来たからです。それまでの化学者は一生に一つの物質の構造が決められれば立派な化学者だったのです。ふぐ毒、テトロドトキシンの構造を決めることが出来たのは嬉しい仕事でした。世界的な化学者達と競うことが出来、時間との勝負に負けなかったという事です。後、コレステロールが過剰な人への薬、メバロチンの元になる ML236B という物質の構造を決め、これが世界的にも大きな反響を呼び、三共の屋台骨を強くしました。これらのストーリーを纏めるよう義也に促され新書版で400ページ程書きましたが他のことに目が移り未完のままです。